

タイの国民国家形成に関する代表的な研究としては、トンチャイ・ウィニツチャクンの *Siam Mapped* [1994] があげられる。トンチャイは、「地理的身体」(geo-body) という概念を使用して近代の国民国家形成を検証し、「シャム」<sup>1)</sup> が言説としての構築物であったことを示した。同書では、「タイらしさ」を明確にするために、他者性の創出、とくに敵の創出が行われたこと、「地理的身体」が敵の創出に大きな役割を果たしたことに焦点をあてた。これに対して本書は、タイ国内における「サヤム世界」「タイ世界」「マレー世界」の3つ世界、特に最初の2つの世界の間のせめぎあいについて着目し、国民国家形成について論じた点が興味深い。

アユッタヤーを起源とする「外来人国家」である「サヤム世界」が「タイ世界」の文化を取り込み、長い時間をかけてタイ国を構築中であるという説明は、一定の説得力を持つように思われる。しかし、議論を子細に検証してみると、いくつかの疑問点も浮かび上がる。「サヤム世界」の外来人国家性と「マレー世界」の独自性については丁寧に論じられており、これらの点については学術的にも妥当性があると思われる。

更なる検討が必要だと思われるのが、「タイ世界」に関する記述であろう。著者は「タイ人らしさ」が、近代の国民国家形成期以降に創出されたものであると論じる一方で、スコータイ、アユッタヤー、そして周辺の小さいクニの中に、核となるタイ的要素を探し出そうと試みている。しかし例えば、アユッタヤー朝において「外来人」も菌向かうことができなかつたとされる強大な王権とそれを支えた王統は、外来人的要素なのか、それともタイ的要素の核といえるのか。また王宮を中心とする一部で使用されているに過ぎなかつたタイ語は、タイ的要素といえるのか。加えて、「タイ世界」では東北部と北部のムアンが取り上げられているが、タイにおける民族構成や使用言語の分布が非常に複雑であることが知られている。果たしてこれらと同じ「タイ的要素」として一からげ

にすることが妥当であるのだろうか。そもそも「タイ」とは何を指すのであろうか。タイ民族に関する言語学的見地からの研究として、チット・プーミサックの『タイ族の歴史』[1992年、坂本比奈子訳]が存在するが、同作品の中でも「タイ」(thai)という言葉の意味が時代とともに変化発展してきたことが指摘されている。曖昧で捉えどころのない「タイ」は、真に実体があるものとして描くことができるのか否か、更なる検討が必要だと思われる。

以上、幾つかの疑問点をあげたが、著者の豊富な知見に基づく本書の議論は大変刺激的である。タイ歴史研究のみならず、政治や文化の研究においても多くの学術的な示唆を与えてくれる。今後のタイ研究の進展に大きな貢献が期待される作品といえよう。

(外山文子・筑波大学人文社会系)

#### 参考文献

- Cit Phumisak. 1976. *Khwam pen ma khong Khwam Sayam Thai Lao le Khom le Laksana thang Sangkhom chu Chonchat*. Bangkok: Munnithi Khrongkan Tamra Sangkhomsat lae Manutsayasat. (チット・プーミサック. 1992. 『タイ族の歴史——民族名の起源から』坂本比奈子(訳). 井村文化事業社発行. 勁草書房販売.)
- Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press. (トンチャイ・ウィニツチャクン. 2003. 『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄(訳). 明石書店.)

川中 豪；川村晃一(編著). 『教養の東南アジア現代史』ミネルヴァ書房, 2020, xi+360p.

本書は、大学の学部生や社会人などを対象に、東南アジア現代史を多面的に概観したものだが、日本で東南アジアに対する関心と、地域事情を解説した入門書や概説書へのニーズが大きいためか、類書が少なくない。ここ数年に刊行されたもの

1) タイの昔の国名。1939年にシャムからタイに変更された。

けでも、『はじめての東南アジア政治』(2018),『東南アジア現代政治入門』(2018),『東南アジア地域研究入門3 政治』(2017),『入門 東南アジア近現代史』(2017),『入門 東南アジア現代政治史』(2016),がある。東南アジアについての入門書市場が、いわば「競合状態」にあるなかで、本書はそれに「参入」したもののだが、評者も市場参入者の一人であることから、以下では、評者の自省を込めながら、本書のねらい、構成とテーマ、本書の特徴と評者の評価点、要望点を述べてみたい。

編者の「はしがき」(pp. i-iii)によると、本書のねらいは次の点にある。「東南アジアと聞いて日本人が抱くイメージは様々である」、「思い浮かべる像は実は東南アジアのどこかの特定の地域の風景である。それぞれが東南アジアであることは確かだが、これをバラバラな知識として理解しているというのではなく、もう少し包括的に東南アジアを理解する手がかりを提供」すること、がそうである。評者は、本書のねらいは、東南アジアの全体像、すなわち、「東南アジア像」を知る手がかりを提示することにあると理解するが、これについては後で触れてみたい。

そのためのアプローチとして次の手法がとられた。編者によると、これまでの東南アジア史へのアプローチは2つあり、1つは、インドネシア、フィリピン、タイなど国家単位で歴史過程をみるもの、もう1つは、植民地支配期、第2次世界大戦期、戦後の独立期など、時代区分に基づいてみるものである。編者は、この2つは、いずれも歴史を理解するうえで基本的な見方としながらも、敢えて本書は、第3のアプローチを採用したという。すなわち、「国家建設、経済発展、政治体制、民族、宗教といったテーマで各章を区分し、それぞれの視点から東南アジアの現代史を理解しようとする」、ことがそうである。その理由は、前2つのアプローチに基づいて書かれた東南アジア現代史が多いこと、これに対して、本書のアプローチを採ると、「政治学、経済学、社会学といった社会科学の知見を活用することによって、東南アジアの政治、経済、社会、それぞれの領域の変化を筋道立てて理解することに役立つ」こと、それに、

「政治学、経済学といった道具を使って東南アジアの歴史的な変化を提示することで新たに見えてくるものがある」、と考えたことにある。

この方針の下で、構成は次のように編成されている。まず、序章の「東南アジア現代史を学ぶ」で、1章以下のテーマ章を理解するための基礎知識として、植民地末期以降の東南アジアの政治、経済、社会の動きが提示される。これを受けて、第1章「植民地支配とナショナリズム」、第2章「国家建設」、第3章「経済発展」、第4章「民主主義と権威主義」、第5章「法の支配」、第6章「軍」、第7章「民族」、第8章「宗教」、第9章「地方」、第10章「社会階層・格差」、第11章「メディア」、第12章「ジェンダー」、第13章「人の移動」、第14章「国際関係」、第15章「日本と東南アジア」、と15のテーマから東南アジアに接近して、複眼的、総合的に理解できるように配慮と工夫がなされている。

16人からなる執筆者は、政治学や経済学や社会学や外交史などの専門研究者、具体的には、地域研究者、政治研究者、経済研究者、社会研究者など多様で、いずれも、それぞれのテーマについての長い研究歴と実績、独自の知見を持った、第一線で活躍する人びとである。

このようなねらいと執筆者からなる本書の特徴として2点を挙げてみたい。

第1は、政治学や経済学など社会科学の知見を使って東南アジアを照射していることである。一国研究に特化した地域研究者の手になる、叙述を中心にした入門書や概説書が多い中で、これが本書の特徴の一つとすることができる。一例を挙げると、国家建設のテーマ章での「強い国家と弱い国家」の分析視点、経済発展のテーマ章でのマクロ統計数字を使った分析と考察、民主主義と権威主義のテーマ章での世界指標を基にした東南アジア諸国の比較検討、国際関係のテーマ章での「平和と協力」を軸にした東南アジア諸国連合(ASEAN)の考察、がそうである。これは、本書が「学」(ディシプリン)の視点から東南アジアを捉えて説明したものであり、類書に対する強みの一つになっている。

また、本書は読者の関心に従って、例えば、「ジェンダーからみた東南アジア」や「軍からみた

東南アジア」についての簡単な入門・概説書として利用することも可能である。それだけでなく、世界各地のジェンダーに関心がある読者は、アフリカや中東などの関連書などを読み、本書のジェンダーのテーマ章を読むと「世界の実態」を知ることができる（言うまでもなく、実態解説に終わることなく、専門研究者の知見が提示されている）。この点で、本書は15テーマの小冊子に分解できること、逆に言えば、15テーマの小冊子が一つになった現代東南アジア入門書とみることも可能であり、これも本書の特徴の一つである。

第2は、それぞれのテーマの専門研究者が書いた本書は、東南アジアが、国毎の政治や経済や社会や民族文化が「多様」なことを教えてくれることである。しかし、それ以上に評者が強く感じたのは、執筆者一人一人の東南アジアを見る眼やアプローチ、それに、関心や思い入れが「多様」であることである。例えば、比較政治学をもとに東南アジアの実態を捉えた民主主義と権威主義のテーマ章と、植民地化前の時代からはじめて現代まで、歴史の時系列に即してみた人の移動のテーマ章とでは、アプローチと対象時期がまったく違う。東南アジアに対する思い入れ（そこに住む人びとへの関心という意味）も、それぞれの執筆者にみられるなかで（言うまでもなく、分析対象への感情移入がありながらも、対象を客観的に見る科学性は保証されている）、とりわけ評者がそれを感じたのは、社会階層・格差、それにジェンダーのテーマ章である。このことは、本書が読者に、単に現代東南アジアについての様々な基礎知識だけでなく、それをみる研究者の姿勢や意識の多様さを提示していることを意味する。これは、編者が意図したものではなかったかもしれないが、結果的に、本書の魅力の一つになっている。

次いで、要望を3点述べてみたい。

第1は、構成に関わるもので、「経済」のテーマ章が弱いことである。本書が『東南アジア現代政治史』であるならば、これは何の問題もないが、政治、経済、社会の多様な側面から東南アジアを捉えるというねらいからすると、経済に関するテーマ章は充分ということではできない。評者は、独立後の東南アジア諸国の二大課題は、多民族型

社会を一つに纏める国家形成と、植民地時代の貧困から脱却する経済開発だったと考えているが、経済発展のテーマ章だけで、後者を説明するには無理がある。そのため、例えば、農業国から工業国に転換することを目的にした開発政策の「工業化」、伝統的に東南アジアは農業国が大半なことから、その過程で農村がどう変容したのか（しなかったのか）説明した「農業・農民」のテーマ章があれば、経済の理解がより深まったのではないかと思う。

第2は、これは、本書が社会科学の知見、すなわち「学」をもとに東南アジアをみることの裏返してもあるが、東南アジアの「素顔」がよくみえてこないことである。比喩を使って言えば、「学」をもとに東南アジアをみることは、高い空の上を飛ぶ飛行機からみることであり、これによって地上を歩いていたのでは分からない、「全体」や「輪郭」を掴むことができる利点がある。しかし、その反面として、地上に住み暮らす人びとの姿を知ることができない問題がある。ただ、いくつかの章末に配置された、鉄道、国民食バッタイ、デモの舞台裏、アブラヤシ農園など、街や人びとを素描したコラムが、その役割を果たしていることは確かである。しかし、評者の経験からして、容易ではないことを承知の上で言えば、社会科学の知見と東南アジアの素顔を文中で繋ぐ、あるいは、行間から滲み出てくるような営為が必要であるように思う。

第3は、それぞれの執筆者が考える「東南アジア像」の提示が欲しかったことである。評者が、入門書の最終目標は、執筆者（研究者）が考える「東南アジア像」の提示にあると考えているからである。それには2つのアプローチが有効だと思う。一つは、自分の専門テーマを中心に東南アジアを「広く」知ること、もう一つは、世界の他の地域と比較することである。他地域との比較は、自分の関心に従って、どの地域でもよいが、東南アジアがアジアの一員でもあることから、東アジアや南アジアとの比較が有用というだけでなく、必要でもあるように思う。これによって、「アジアのなかの東南アジア」がみえてくるからである。

本書評は、優れた点の指摘よりも、要望点のほ

うが多くなってしまったが、これは、東南アジアに関する書籍の読者の一人でもある評者が、東南アジアのこの面をもっと知りたいという自分の希望を書き連ねたためであり、何よりも、才気煥発で有能な本書の執筆者たちに、今後それをぜひとも期待したいからでもある。

最後に、本書のタイトルは『教養の東南アジア現代史』だが、教養とは何か、『広辞苑』をみると、①教え育てること、②学問・芸術などにより人間性・知性を磨き高めること、とある。本書の意図

は、後者にあると思われるが、本書が「多様性」をキーワードにする東南アジア現代史について様々な知識と知見を提示しているだけでなく、執筆者の東南アジアへの関心や思い入れも様々であること、すなわち、研究者の東南アジアを見る眼の「多様性」も提示していることから、本書を読んだ読者が、「学問によって知性と人間性を磨き高める」という狙いをうまく達成しているように思う。

(岩崎育夫・前拓殖大学)